

東日本大震災における被災地訪問・巡礼とゼミ学生の学びの意義 — 福島県、宮城県の被災地を中心に —

The meaning of learning of students of seminar inspection and pilgrimage activities in the Great East Japan Earthquake :

Focused on the damaged areas in FUKUSHIMA, MIYAGI prefecture

田 中 卓 也

概要

執筆者およびゼミ学生（K大学教育学部田中卓也ゼミ4期生）は、東日本大震災における被災地訪問・巡礼として、2016（平成28）年3月16日～17日の2日間に福島県富岡町をはじめ、楡葉町、広野町、いわき市を、2016（平成28）年8月21日～22日の2日間に岩手県の陸前高田市、宮城県の多賀城市をそれぞれ訪れた。学生の被災地訪問・巡礼を通じて被災地について学ぶのではなく、被災者の「語り」の重要性、震災の記憶を止めながら教訓として伝承していくことの大切さを学ぶことになった。

キーワード：東日本大震災、被災地訪問・巡礼、大学生、ゼミ活動、学び

1. はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—
2. 被災地における学生の動機と被災地訪問・巡礼
3. 福島県富岡町、楡葉町、広野町、いわき市の概要と被災状況
4. ゼミ学生の連携と情報交換
5. 執筆者による事前視察
6. 事前学習と準備
7. 第1回被災地訪問・巡礼（「さわやかふれあい研修」）
8. 岩手県陸前高田市、宮城県多賀城市の概要と被災状況
9. 第2回被災地訪問・巡礼（「岩手・宮城研修」）
10. 被災者の「語り」における学生の意識の向上
11. 小学校・防災系高校訪問における防災意識の理解・重要性
12. 震災の記憶とおよび教訓の伝承
13. おわりに—被災地訪問・巡礼と残された課題—

1. はじめに

—本研究の目的と先行研究の検討—

2011（平成23）年3月11日14時46分に「東北地方太平洋沖地震」（最大震度7、マグニチュードは9.0であった）が突如発生した。この地震は、大きな津波や原子力発電所の事故などさまざまな災害をうみだした。

地震、津波、原発事故をふくめた「東日本

大震災」は、これらの諸災害の総称でよばれ、多くの人々の生命や生活、地域の文化や歴史を一瞬にしてのみこんだ。ちなみに全国における被害状況は死者15,841人、行方不明者3,485人、建物全壊126,348棟、建物半壊227,453棟と記録されている¹⁾。

震災はそれだけにとどまらず、生活していた多くの人々のライフスタイルや価値観を覆

1) 警察庁緊急災害警部本部「平成23年度東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」（広報資料）、2011年、2～4ページ。（2019年3月8日付）

すような、大きな出来事として多くの人々に衝撃を与えることになった。

さて東日本大震災に関する先行研究は既に多くの蓄積が存在している。なかでも学生ボランティアに関する研究蓄積も多い²⁾。学生ボランティアとして参加することで、幼児や児童らとのコミュニケーションを通じて、コミュニケーションの能力の向上が見られるだけでなく、活動を重ねるごとに、「被災地の人たちに何かしたい」とか「被災地域を元気にしたい」と思うようになる。活動のふりかえりについても欠かせない。学生はふりかえりを通じて、活動に意欲的になる。執筆者は、「ゼミ活動」を通じて、所属するゼミ学生が被災地での学びに関心を持つのではないか、という思いから、学生らが自主的に訪問したいという強い思いにつながるようになった。



＜図1＞福島県全図
(<http://mapion.yahoo.jp/>)

2. 被災地における学生の動機と被災地訪問・巡礼

田中卓也ゼミは「子どもの遊び・文化&教職総合実践ゼミ」ともよばれており、将来保育者・小学校教諭をめざす学生が所属している。執筆者は、K大学在職中に、被災地支援に大きな関心を持っていた教員らとともに「被災地支援ボランティア」の学生らを引率指導した経験を有している³⁾。執筆者の関心に興味を示す学生も少なくなく、その学生は、3年次に執筆者のゼミを希望し、執筆者のゼミに所属することが多い。学生らは毎年数名は卒業論文のテーマに震災関連テーマを選び、執筆を目指している。

学生は震災に関心を示しているものの、現地にまだ行ったことのない者やテレビなどで放映された状況しか見ていない者も少なくない。被災地を訪問することだけでも、学生らには大きな学びとなるのである。

3. 福島県富岡町、楡葉町、広野町、いわき市の概要と被災状況

福島県は、太平洋と阿武隈高地にはさまれた「浜通り」、阿武隈高地と奥羽山脈にはさまれた「中通り」、奥羽山脈と越後山脈にはさまれた日本海側の「会津」の3地域に分かれる。このたび訪れた富岡町、楡葉町、広野町およびいわき市は福島県の東南端「浜通り」に位置し、いわき市は茨城県との県境に存在する町である。いわき市の人口は342,198人で、福島県内第1位の人口規模になっている。

2) 茶屋道拓哉・筒井睦「東日本大震災におけるボランティア活動の教育的意義」『九州看護福祉大学紀要』(第12巻、2012年)、多田内幸子・重永茂「東日本大震災後の幼児教育学科学生のボランティア活動に対する意識の変化」(『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』(第35巻、2012年)、斎藤真宏「東日本大震災被災地ボランティアの学生の学び」『特別課題研究“震災・学校危機と教師教育 研究報告集 震災・学校危機の教訓から学ぶ—希望ある未来のための理論化にむけて—」(日本教師教育学会、2017年) 所収論文)。和井田節子・田中卓也・小林田鶴子・小泉晋一「被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味—石巻市内の小学校における支援活動を通して—」『共栄大学研究論集』(第

11号、2013年)

和井田節子・小泉晋一・小林田鶴子・田中卓也「東日本大震災の津波被害から回復しつつある小学校への支援—教員養成課程の大学生によるボランティア活動の可能性と課題—」『共栄大学研究論集』(第13号、2014年)

3) 執筆者はK大学在職時に被災地支援活動に関心を持っていた教員らとともに「被災地支援ボランティア」の引率教員として、2012年9月から2015年2月(大学の講義の行われない2月・9月)まで活動した。

4) 総務省統計局『平成22年国勢調査 人口速報集計結果 全国・都道府県・市町村別人口及び世帯数 結果の概要』2011年。(2019年3月12日付)

(ちなみに郡山市：338,772人、福島市292,280人⁴⁾と報告されている。

東北地方にあって、比較的穏やかな気候であり、山間部を除いては積雪もあまり見られない。高度経済成長期までは炭田を中心とした産業で生業を形成した場所であった。1960年代以降の石炭から石油への「エネルギー革命」以降、その様相は変化することになった。炭鉱業の斜陽化は、この地域の経済の停滞を意味したが、町おこし事業として立ちあげるようになった「常磐リゾートハワイアンズ(現在の「スパリゾートハワイアンズ」)に代表されるような観光業で一躍復興を遂げた⁵⁾。

なお東北地方太平洋沖地震によるによる、代表地点であるいわき市の地震と被害状況は以下の通りである⁶⁾。

【警報等発表状況】

- ・3月11日 14:46 震度6弱
- ・4月11日 17:16 震度6弱
- ・4月12日 14:07 震度6弱
- ・9月29日 19:05 震度5強

【人的被害の状況】

- ・死者 310人(うち4月11日余震による者3人)
- ・行方不明者 38人
- ・重傷者 3人(4月11日余震による)
- ・軽傷者 1人(4月11日余震による)

【住家被害の状況】

- ・全壊 7,590棟
- ・半壊 29,187棟
- ・一部破損 41,298棟

いわき市の被災状況もかならずしも小規模のものではないことがうかがえる。この被災状況についても事前に学生等は習得して被災地に向かうことになる。

4. ゼミ学生の連携と情報交換

被災地訪問・巡礼を行うに当たってはさまざまな方からの協力を得た。被災地支援活動および研究を行う福島大学の教員の方々、日

本環境教育学会の「被災地プロジェクト」所属会員や先生方に、大方の内容は事前にうかがうことができた。また訪問前に訪問を予定していた小名浜第二小学校のN校長先生にご相談にも乗っていただいた。N校長先生は、私たちの被災地訪問・巡礼のお願いに対し、厚意的に受けてくださり、ご協力いただいた。福島県内の被災地で訪れるとよい箇所についてもいくつかご照会いただいた。また今後機会があれば、ボランティア活動を行うことも進言され、ボランティア活動をするに当たっての情報提供、関係調整なども行っていただいた。それらは単なる訪問・巡礼活動にとどまらず、「学ぶ機会」や「被災地における教育的側面」を考慮した内容であった。学生らはインターネットでの検索や、福島県の観光協会に問い合わせたりしながら、この情報を収集し、その後ゼミ学生らに事前学習を行うための土壌が次第に整備されていくことになった。

5. 執筆者による事前視察

当初、執筆者のゼミメンバーは確定しても、互いにメンバーと面識がほぼなかったり、積極的な交流も見られず、学生らはよそよそしい振る舞いであった。また被災地訪問・巡礼に無関心な学生も当初存在した。ゼミで当初企画していた「さわやかふれあい研修」の中にこの活動を位置づけ、研修の一環で行うことになった。「被災地訪問・巡礼」の実施前に執筆者のほうで現地訪問を試みた。なお2016(平成28)年2月27日～28日の2日間の日程で行った。

K大学をレンタカーで出発し、久喜市に入り、久喜市内で早めの朝食をとった後、久喜ICから東北自動車道を走行し、目的地であった岩手県の富岡ICで降車した。富岡ICを降りてからは、国道4号線を南の方向に進め、海岸沿いの被災地域を車中から見学した。

南へ車を走らせると、道路両脇に至る処

5) 当時の様子については、映画「フラガール」(2006年公開。松雪泰子主演)においてもうかがうことができる。

6) 福島県災害対策本部『平成23年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報(第454報)』2011年12月13日(火)8時現在。(2019年3月13日付)

に、「立入禁止区域」の看板が立てられており、マスクを着用した白服の作業員が数名警備にあっていた。その光景を後にしながら、檜葉町を経て、広野町に入り、「J-Village」(ジェイビレッジ)を見学した。当時の工事請負業者や土木建築業者等の車両が所狭しと並んでおり、Jリーグ日本代表選手の合宿所の様相は全く見られなかった。

広野町を過ぎると、いわき市に入る。いわき市では、沿岸にある「豊間海岸」、「薄磯海岸」および「塩屋埼」、被災した小名浜港内に立地する「いわき ら・ら・ミュウ」、「スパリゾートハワイアンズ」を訪問した⁷⁾。

また小名浜市立小名浜第二小学校に研修当日は訪問予定であるため、事前に執筆者のほうからアポイントメントの確認、研修時間、見学施設などを綿密に行った。さらにはいくつかの訪問先の場所位置確認や執筆者および学生の宿泊先ホテルの位置確認についても行った。

大学に戻ってから、学生にはメール連絡にて事前現地調査の報告を行い、学生らの不安の軽減につなげることに努めるようにした。

6. 事前学習と準備

活動の実施には、4期生のゼミが発表された2016(平成28)年2月初旬に、学生を一度召集した。3月初旬頃までに、学生らで福島県内の被災地において、目に留めておきたい場所を各自でピックアップしてもらいながら、情報収集を行った。ゼミ長を中心にプロジェクトチームが組まれることになった。また、事前に被災地活動における注意点の指導、被災地入りした経験のある数名の先生方から情報提供やアドバイスをいただくことになった。また、「研修のしおり」を執筆者とゼミ学生の共同で作成した。研修の目的・意義を互いに確認しあうだけでなく、訪問先の情報や質問内容の検討についても、学生同士で互い

に分担を決め、連絡を取り合いながら、編集した。

7. 第1回被災地訪問・巡礼タイムテーブル

ここでは、実際の被災地訪問・巡礼について、時系列にして記述することにした。まずは3月16日の日程を以下に見てみることにしたい。

(1) 3月16日(1日目)の日程

5時 K大学出発
 5時20分 東北自動車道久喜IC着
 途中佐野SA、壬生SA、安達太良SA
 において休憩および食事
 9時 小野IC着
 10時 「リカちゃんキャッスル」着
 11時30分 昼食
 13時30分 「あぶくま洞」着
 15時30分 「三春滝桜」見学
 16時30分 「さくら遊学舎」(三春町立旧桜中学校・福島ガイナックス) 見学
 20時 いわき市「アクアマリン福島」
 「ら・らミュウ」着

<1日目終了>

(2) 3月17日(2日目)の日程

9時 ホテル発(エコホテルいわき)
 9時20分 「スパリゾートホテルハワイアンズ」着。見学
 10時30分 いわきICより、高速道路へ
 東北自動車道富岡IC着(IC降車後は国道4号線を走行)
 10時45分 JR富岡駅着 車中より見学
 富岡第一小学校、富岡中学校を車中より見学
 11時15分 檜葉町着
 11時45分 広野町着 「J-Village」見学
 12時20分 いわき市着
 12時30分 豊間・薄磯海岸着。塩屋埼

⁷⁾ 豊間・薄磯海岸は、県内有数の海岸であり、夏には海水浴でにぎわいを見せている。昔はウニ、アワビの磯漁がさかんであり、地域の方々は生計を立てていたという。最寄りにある塩屋

埼をふくめたこの地域は、「福島県三十景」ともよばれ、とりわけ薄磯海岸は「日本の渚・百選」に選ばれている。「(いわき市ホームページ)(city,iwaki,lg.jp)。

周辺見学
 12時45分 昼食
 13時30分 小名浜第二小学校着 N校長先生からの講話（震災時の様子。小学校および小名浜港周辺）
 15時 小学校出発。小名浜港見学
 16時 「ら・ら ミュー」着 見学
 17時 「勿来閑跡」見学
 <2日目終了>

1日目はおもに福島県の地域の観光を中心に、2日目から本格的な活動を実施した。学生が事前に被災地でぜひ訪れたいと取り上げた地域、施設を中心にできるだけ訪れるよう尽力した。1日目は比較的和気藹々とした雰囲気の中で、なごやかな雰囲気で研修旅行は進行したが、2日目の富岡町に到着した頃から、学生らが適度な緊張感に包まれ、静まり返る様子となった。彼らは車中から被災地の様子を観察していた。地域の方々は、当町が「避難警戒地域」であったこともあり、すでに富岡町を後にしている様子であり、多くの住宅は静寂の様子であった⁸⁾。当然であるが、信号機もすべてが点灯しているわけではないが、交通量はおびただしい状況であった。コンビニエンス・ストアやショッピングセンター、酒屋、文具店なども営業していない。再開がいつになるのか目処が立たない状況が続くことは確かであった。

国道4号線をすぐ左へ折れると、太平洋の沿岸地域となる。被災の状況を知るべく、車で沿岸部を走ったが、震災の爪痕は大きいものであった。学生は無言のままである。しかし何かを感じ取っている様子であった。

学生らは言葉こそ発しなかったが、彼らなりにこの状況を理解したうえで、どのような対応を今後とっていくべきかを考えている様子に見受けられた。

昼食を済ませ、13時30分に小名浜第二小学校に到着し、N校長先生より校長室にて講話をいただいた。3月11日のいわき市小名浜地区の被災の状況および学校の対応について、詳細にご説明くださり、被災当時の写真についても見せていただくことになった。「迅速の対応」、「子どもたちを最後まで守ること」など今後学校現場で就職する学生たちを前に一生懸命語ってくださった。N校長先生も被災者の一人である。学生たちは、神妙な面持ちで校長先生の講話を聴き、気になる点、感想などを全員が伝えることになった。話を聞いているうちに、涙をぬぐう学生も散見された。被災者の「語り」の重要性とその意義について改めて感じた瞬間であった。

(3) 学生の感想から

ゼミ学生の思いも様々である。男子学生Aは「東日本大震災の震災の状況は、テレビなどメディアを通じて知ることになった。実際に福島に来ることになり、様子をみたら愕然とした⁹⁾」という感想や「海沿いの地域を見ていると、津波の大きさが尋常ではなかったことがわかる。テレビで見ている、すごい破壊力であったのに、現実とその場所を見たら、倍以上の恐ろしさを感じずにはいられなかった」という感想を述べている¹⁰⁾。

また、「富岡駅の駅舎が津波で流されたのであろうか、跡形もなかったのに言葉を失った。電車を毎日利用していた通勤も学生や社会人の方々は、これからどうしていくべきなのかを考えたが、先が読めない不安に駆られ、やる気をなくしてしまうのでは」と被災地域やその場所で生活をしてきた被災者らに気遣いを見せる女子学生Cの感想や¹¹⁾、「家はたくさんあって毎日を楽しく明るく過ごしていたであろう多くの家族が、この震災によりそれまでの家族が一変してしまう。いまこそ家族の

8) 「避難警戒区域」、「立ち入り禁止区域」の看板は、幹線道路の入り口等を中心に立てられていた。福島県第一原子力発電所の近隣地域である富岡町、檜葉町などでは多く見られた印象を受けた。いわき市内には富岡町、檜葉町の方が原発事故の影響により移住することになった仮設住宅も

多く立ち並んでる光景も見られた。

9) ゼミ男子学生Aの感想

10) ゼミ男子学生Bの感想

11) ゼミ女子学生Cの感想

12) ゼミ女子学生Dの感想

復元を急がないといけない」と家族について心を寄せる女子学生Dの感想も見られた¹²⁾。この経験が彼らの被災地への思いを一層強くすることになった。

8. 岩手県陸前高田市、宮城県多賀城市の概要と被災状況

(1) 陸前高田市

岩手県は国内で有数の肥沃の土地を有し、「南部富士」で知られる岩手山を中心に広がる山々とリアス式海岸で知られる三陸沖が県東側に位置する、山と海に恵まれた地域である。かつて文豪の宮沢賢治も故郷「岩手」を「イートハーブ」と呼び、地元を愛したことは知られているところである。陸前高田市は三陸沖の南側に位置し、人口23,300人(平成30年10月1日現在)の小さな都市である。なお、東北地方太平洋沖地震による陸前高田市の地震と被災状況は以下のとおりである¹³⁾。

【警報等発表状況】

・3月11日 14:46 震度6弱

【人的被害の状況】

・死者 1,881人
・行方不明者 72人

【住宅被害の状況】

・全壊 3,159棟
・半壊 182棟
・一部破損 27棟

陸前高田市では、おもに津波の影響により、1,000人を超える尊い命が奪われた。江戸時代におこった三陸沖地震以来の大規模地震であったといわれる。

(2) 宮城県多賀城市

宮城県は東北地方の中でも有数の農林水産業の活発な県であり、農業および水産業の発展が著しい発展を遂げている。とりわけ、サンマの漁獲量は全国2位、ダイコンの消費量

は全国3位との記録がある。仙台の牛タン、ずんだなどは全国的に知られ、七夕まつりや日本三景のひとつである「松島」なども有名である。東北地王にあって降雪量も比較的少なく温暖な土地柄である。

多賀城市は宮城県のほぼ中央に位置し、古くは平安時代に征夷大将軍で知られる坂上田村麻呂により、陸奥国府「多賀城」が築かれた場所でもある。人口は62,081人(2018年10月1日現在)であり、県庁所在地の仙台市のベットタウンになりつつある。

なお、東北地方太平洋沖地震による多賀城市の地震と被災状況は以下のとおりである¹⁴⁾。

【警報等発表状況】

・3月11日 14:46 震度5弱
・3月11日 14:47 震度5強
・4月7日 23:32 震度5強

【人的被害の状況】

・死者 188人
・行方不明者 72人

【住宅被害の状況】

・全壊 1,746棟
・半壊 3,730棟
・一部破損 6,169棟

多賀城市においては、太平洋岸にある地域であることから、津波の被害の甚大さがうかがえる。

9. 第2回被災地訪問・巡礼(「岩手・宮城研修」)

春期研修で行われた被災地訪問・巡礼は彼らゼミ学生のなかに強く印象付けられた。夏季研修においても、被災地へのゼミ学生らの思いがつながることになった。

2016(平成28)年8月21日～22日までの2日間に、同ゼミ学生と執筆者はゼミ夏期研修として岩手県、宮城県を訪問した。その際にも被災地訪問・巡礼を実施することとなり、岩

¹³⁾「東日本大震災における地方公共団体情報部門の被災時の取り組みと今後の対応の在り方に関する調査研究(『現地調査報告書』抜粋)、2011年、地方自治情報センター」4ページ。(2019年3月15日付)

¹⁴⁾「多賀城市における東日本大震災の被災状況概要」(平成30年8月1日現在)『東日本大震災の被災状況概要』(city.tagajo.miyagi.jp)より。(2019年3月16日付)

手県の陸前高田市にある「奇跡の一本松」、宮城県多賀城市に所在する「宮城県立多賀城高等学校災害科学科」を訪れることになった。とりわけ訪問を強く望んだのは、「東日本大震災の防災教育」をテーマに卒業論文の執筆を希望する学生であった。被災地訪問・巡礼は一見地味に見えるが、コツコツ継続することの大切を学生が感じるようになっていたことが挙げられる。

(1) 8月21日(1日目)の日程

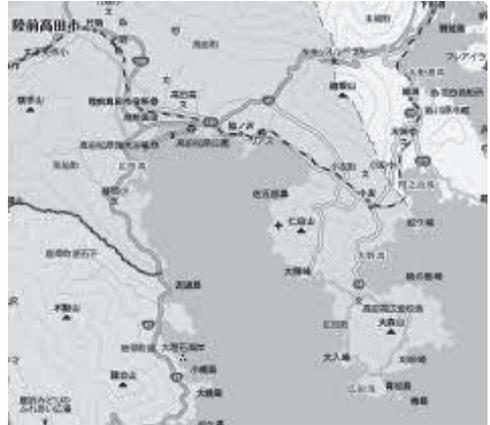
8月21日の夏季研修の日程は、以下の通りであった。

- 5時 K大学出発
 - 5時20分 東北自動車道久喜IC着
途中佐野SA、壬生SA、安達太良SAにおいて休憩および食事
 - 10時40分 一関IC着
 - 11時 平泉中尊寺金色堂見学
 - 12時 昼食(わんこそば・東屋)
 - 13時 盛岡IC乗車
 - 14時30分 陸前高田IC着
「奇跡の一本松」見学
 - 16時 陸前高田IC乗車
 - 17時30分 松島見学
 - 19時30分 宿泊先ホテル着
- <一日目終了>

(2) 8月22日(2日目)の日程

8月22日のスケジュールは以下の通りであった。

- 9時 ホテル発(チサンホテル一関インター)
 - 9時20分 一関IC乗車
 - 11時30分 多賀城市着。
 - 11時45分 多賀城高等学校到着
「災害科学科」見学
校長先生、教頭先生からの講話。質疑応答
 - 14時 多賀城IC乗車
 - 15時 仙台市到着。昼食
 - 17時 自由時間(2時間)
 - 18時 仙台IC乗車
 - 22時 K大学着、解散
- <2日目終了>



<図2> 陸前高田市および周辺地図
(<http://map.yahoo.jp/>)



<図3> 多賀城市および周辺地図
(<http://map.yahoo.jp/>)

春期研修と同じく、朝5時にK大学をレンタカーにて出発した。久喜市内で朝食をとり、久喜ICより東北自動車道を走行した。途中、食事やトイレ休憩を入れながら、目的地に到着した。「奇跡の一本松」については、震災の影響で舗装されていない道路を抜けながら、到着した。最寄りの駐車場に車を止め、5、6分ほど歩いたところにその松は存在する。松の周辺はまだまだ震災の爪痕が残っており、津波と地震の大きさを感じさせられた。「奇跡の一本松を見ることで、私たちはどん

な状況に置かれても、ひるむことなく、この松のように立ち続けなければならないと感じた。自分の甘さを見直し、この松の存在のように強くなりたい」と学生Eは述べている¹⁵⁾。

また多賀城高等学校では「災害科学科」を見学させていただいた。全国における県立の防災専門の高等学校は、兵庫県の舞子市にある「舞子高等学校」の「環境防災科」と同校の2校のみである¹⁶⁾。

まずは校長先生と教頭先生より、「多賀城高等学校」の説明を受けたのち、3月11日当時の多賀城市内の災害状況と学校の対応についてお話をいただいた。被災時に撮影されたDVDや写真などを見せていただきながら、「災害時の教師のあり方」について、懇切丁寧にお話をいただいた。また災害科学科のカリキュラム（「自然科学と災害」、「英語」の授業の特色など）や授業についても説明いただき、特色のあるものであると感じた。

卒業論文について「東日本大震災後における防災教育」をテーマとして考えている男子学生Fは、「災害は決して他人事ではなく、自分にもいつかふりかかることであるから、一人の市民として災害知識や防災知識を習得し、意識を高めていく必要があると感じた」と話す¹⁷⁾。多くの学生は、「被災地巡礼できたけれど、被災地巡礼以上に私たちは多くのことを得た気がしている。東日本大震災といって、関東地方で勉強する私たちには関係ないと思っていたが、大きな誤りであったことに気づかれた」と反省している学生も少なくなかった¹⁸⁾。

2日間の岩手・宮城夏期研修であったが、ゼミ学生に被災地の状況がよく伝わっていると感じた。では、春季研修と夏季研修を経験

したゼミ学生らは、どのようなことを学びえたのであろうか。次章で明らかにしていきたい。

10. 被災者の「語り」における学生らの意識の向上

被災地を訪問し、当事者の方や学校関係の方々に被災された際の状況について、語ってもらうこともしばしばである。30分から長い時には1時間、2時間になることもある。このような貴重な経験を通して、訪れた学生らは、真剣なまなざしかつ硬い表情を見せながら、話を聞いている。メディアを通して見た震災の映像とはまた異なる映像が彼らの中にうまれることで、彼らがさらなる関心を示すようになった。

このような出会いを通じて、震災のことをさらに知りたい、調べたいという思いを強くすることになった。

11. 小学校訪問・防災系高校訪問を通じて理解した防災意識の重要性

被災地訪問の一つに、地元の学校を訪問するプログラムを取り入れている事例は多くみられる。ゼミでは将来、小学校教諭をめざす学生も少なくないため、災害発生時、教師の対応などを実感し、習得することが求められる。

小名浜第二小学校を訪問した際には、同小学校で使用している「防災マニュアル」、「防災指針」といわれる書類を閲覧した。普段目にするものがない資料を見ることで、防災の大切さを改めて感じるようになった。また教師目線でみてみると、普段からどのように児童らに防災意識を持たせ、それを育てていく

15) ゼミ男子学生Eの感想

16) 「宮城県立多賀城高等学校災害科学科」は、2016年4月に開設された。防災系学科としては「兵庫県立舞子高等学校環境防災科」に続き国内では2校のみである。同学科では「防災・減災のリーダー」を育成すし、その中心的やクワイを担うことを目的としている。（「震災リゲイン」shinsairegain.jp/2015/06/20takajo-hs）より。また「兵庫県立舞子高等学校環境防災科」は、2002（平成14年）4月に発足し、防災教育を推

進する全国最初の学科である。同校環境防災学科では、震災直後から市民救命士（心肺蘇生法）の資格取得に全校挙げて取り組んでおり、市教育委員会作成の副読本『明日に生きる』の実践事例集づくりにも参加し、先進的な実践を進めている。（「兵庫県立舞子高等学校ホームページ」hyogo-c.ed.jp）より

17) ゼミ男子学生Fの感想

18) ゼミ学生6名の感想

べきかについても、新たに関心を持つようになる。しかしながら、各小学校ごとにマニュアルや指針が異なることもあり、学生らは防災意識にさらなる関心を示すようになっていく。時間があれば、小学生にも話を投げかけることも大切である。子どもの時の経験がのちに大きく影響することは知られており、幼少期からの防災意識の必要性を痛感することになった。

また多賀城高校災害科学科を見学した際には、防災のみならず減災という新たなテーマについても訪問した学生らは気づかされた。防災の専門知識を身に付けることは必然的なことであろう。また防災の専門家であることはのぞましいことである。しかしながら、将来いつ災害が起こるのかわからないが、他人事ではなく自分のことと受け止め、市民レベルの防災家としてふるまうことも大切であることを学ばせていただいた。

12. 震災の記憶および教訓の伝承

最後に「震災の記憶」と「教訓の伝承」の大きさである。

「震災の記憶・教訓の伝承について」(第4回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議資料)では、東日本大震災と同じ犠牲と混乱を繰り返さないためにさまざまな提案がなされている¹⁹⁾。「東日本大震災で多くの犠牲者を出してしまった宮城県として、震災の記憶・教訓を広く全国や世界、そして次世代に伝え続けていく」ことや「県全体で震災のみならず過去の災害を振り返り、災害の記録や記憶を集約し、未来に起こり得る災害において、同じ犠牲と混乱を繰り返さない覚悟を持つ」こと、さらに「伝承の意識を共有して震災の記憶・教訓を発信し、災害に関心と理解を持ち続けて行動していく」ことが、私たちに課せられた課題であることを認識することになった。

さらに「伝承の内容(「何を」)東日本大震

災で被災した方々の体験・経験・想いをしっかりと受け継ぐ。また、復旧・復興過程も含め、今回の東日本大震災で得られた教訓、その中で得られた知見などを伝承する」、また「伝承の方法(「どのようにして」)震災遺構・伝承施設などのハードや、語り部・アーカイブなどのソフトの取り組みと、それらを組み合わせながら、防災学習や地域活動、来訪者への対応等により伝承することが望まれる。また、災害発生時の支援等、他地域を訪問して直接伝承する」といったことの重要性についても学ぶことになった。

13. おわりに

—被災地訪問・巡礼と残された課題—

学生の被災地訪問・巡礼は、卒業論文執筆のためだけでなく、彼の人格形成に大きな意義があることがわかった。無関心の学生もそうでない学生もまじりあったゼミ活動のなかで、被災地訪問・巡礼は大きな意義がある。

しかしながら、訪問・巡礼を行う上で多くの課題についても見えてきた。

1点目として、被災地の現状の理解の問題である。5年が経過しようとしている被災地の事情は震災当時のものとは様相が異なってきていることもあり、支援といってもどのような支援が必要なのかを十分事前に把握しておくことが必要である。

2点目に卒業論文をはじめとする資料調査が思うようにできないことである。閲覧できる資料とそうでない資料のほか、個人情報としての資料も存在する。しかしながら、被災者の気持ちを察することが前提であるため、一歩踏み込んだ調査の実施には躊躇することもある。

最後に卒業論文の執筆に学生がとりかかる時期が極めて遅いことである。このようにならない指導をすべきであるとは考えるが、学生の進路を考えると、困難な事情であることも否めない。今後の改善策をしっかりと考えな

¹⁹⁾「震災の記憶・教訓の伝承について」(第4回東日本大震災の記憶・教訓伝承のあり方検討有識者会議資料)。(2019年3月17日付)

くてはならないであろう。

福島県ではいまだに風評被害が見られるといわれる。執筆者とゼミ学生はその風潮を払拭するべく、福島県産の料理を心より味わった。

さてここで取り上げてきたゼミ学生らはすでに大学を卒業し、小学校教諭、幼稚園教諭、特別支援学校教諭、企業、地方公務員として勤務している。彼らが今後の人生のなかで、この経験が大いに活かれることを期待してやまない。

<参考文献>

- ①『日本教師教育学会特別課題研究“震災・学校危機”と教師教育』研究報告書 震災・学校危機の教訓から学ぶ 希望のための理論家にむけて』(日本教師教育学会、2017年)
- ②福島県教職員組合『震災・原発事故記録集 3・11福島の教職員—東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故下で—』(2015年)
- ③茶屋道拓哉・筒井睦【特集】東日本大震災～被災地における支援活動の体験～「5. 東日本大震災における学生ボランティアの教育的意義」『九州看護福祉大学紀要』(第12号、2010年)
- ④栗田充治「防災教育から被災地学習へ」『亜細亜大学紀要』(第15号、2009年)
- ⑤諏訪清二『防災教育の不思議なカー子ども・学校・地域を考える—』(2015年)
- ⑥矢守克也・諏訪清二・船木伸江『夢みる防災教育』(晃洋書房、2007年)
- ⑦諏訪清二『高校生、災害と向き合う—舞子高等学校環境防災科の10年—』(岩波ジュニア新書、2015年)
- ⑧立田慶裕編『教師の防災教育ハンドブック』(学文社、2013年)
- ⑨矢守克也『“生活防災”のすすめ—東日本大震災と日本社会—』(ナカニシヤ出版、2011年)
- ⑩矢守克也・近藤誠司・宮本匠『防災・減災の人間科学—いのちを支える、現場に寄り添う—』(ワードマップ、2011年)
- ⑪磯田道史『天災から日本史を読みなおす—先人に学ぶ防災—』(中公新書、2017年)
- ⑫矢守克也『防災人間科学』(東京大学出版会、2009年)
- ⑬田中卓也ゼミ編『タクゼミ3年生 さわやかふれあい合宿のしおり』(2016年)
- ⑭田中卓也ゼミ編『タクゼミ3年生 岩手・宮城研修のしおり』(2016年)
- ⑮田中卓也ゼミ編『タクゼミ3年生 岩手宮城研修活動報告書』(2016年)
- ⑯広瀬弘忠『人はなぜ逃げおくれるのか—災害の心理学—』(集英社新書、2004年)
- ⑰片田敏孝『人が死なない防災』(集英社新書、2012年)
- ⑱田中卓也「東日本大震災後における教育学部学生の防災知識の習得と防災意識の形成—卒業論文執筆をめざすゼミ学生の事例を中心として—」(子ども環境学会2018年度大会、ウエスタ川越、ポスター発表済、2018年5月17日～18日)